

受験番号「 」 氏名「 」

受験者は、配点の基準を選択することができます。	A	Ⅱ	1	40点	2	40点	3	20点
下記のA・B・Cの内から一つを選び、その記号	B	Ⅱ	1	60点	2	20点	3	20点
を○で囲みなさい。	C	Ⅱ	1	20点	2	60点	3	20点

1 古典文学

次の(ア)と(イ)の二つの話を読み、後の問いに答えなさい。

(ア)

後堀河院、御位の時、X 二十日ごろにや、花山院のたれとかや、蔵人頭にて候はれけり。閑院にて同じく中将なる人、それならぬ若殿上人多く、鬼の間ほどにてみだり居て、さまざまものがたりせらるるに、女房も台盤所※に候ひて、内外居かはすついでに、台盤所の前なる楓かへでを見て、「この木に秋のしるしとおぼえて、初紅葉はつもみぢ一枝、侍りしこそ失せにけれ」と、内侍の中にたれとかや、いひ出でたるを、頭中将、「いづかたの枝にか」と、梢こずえを見上げたるに、「西枝にこそ侍らめ」と、ある雲客いひたりけり。A いみじかりけり。清和、貞観の御時、弘徽殿の前にありける木の、西の方の枝、もみぢはじめたりけるを、

藤原勝臣

B 同じ枝をわきて木の葉の色づくは西こそ秋のはじめなりけれとある古事ふることばを思ひ出でけるにや。

『十訓抄』より

※注 鬼の間——清涼殿の西廂の南端にある部屋。

台盤所——宮中や貴族の家で食事を調達する所。

(イ)

花園大臣はなぞののちとせの御許に、はじめて参りたる侍さむらひの、名簿の端書に、「能は歌よみ」Cと書きたりけり。※殿の秋の初めに南殿に出でて、機織はたおりの鳴くを愛しておはしけるに、暮れければ、「下格子げかうしに人参れ」と仰せられける。「蔵人の五位、たがひて、人も候はぬ」と申して、この侍の参りたるを、「ただ、おのれ、下ろせ」とありければ、参りたるに、「汝なんじは歌よみとな」とありければ、かしこまりて、格子下ろしきして候ふに、「この機織をば聞くや。一首つかまつれ」と仰せられければ、「青柳の」と五文字を出したるを、候ひける女房たち、「折に合はず」と思ひたりげにて、笑ひ出でたりけるを、「ものを聞きはてず、笑ふやうやはある」と仰せられて、「とくつかまつれ」と仰せられければ、

D 青柳の緑の糸をくりかへし夏へて秋ぞ機織は鳴く

とよみたりければ、萩織はぎりたる直垂を押し出して、たまはせてけり。

『十訓抄』より

※注 殿——花園大臣のこと。

機織——今のキリギリス。

問一 空欄 X に入る語として最もふさわしいものを、次の中から選び、記号を○で囲みなさい。

ア 一月 イ 四月 ウ 五月 エ 七月 オ 十一月

問二 傍線部A「いみじかりけり」について、「誰」が「なぜ」そのように思ったのか。具体的に説明しなさい。

問三 傍線部B「同じ枝をわきて木の葉の色づくは西こそ秋のはじめなりけれ」を、現代語訳しなさい。

問四 傍線部C「能は歌よみ」とは、どのような意味か。簡潔に答えなさい。

問五 傍線部D「青柳の緑の糸をくりかへし夏へて秋ぞ機織は鳴く」は、どのような意味の歌で、周囲にどう評価されたか。話の経緯も踏まえて、詳しく説明しなさい。

次のA・Cは小説の冒頭部、Bは詩の全文です。後の問い(①・②)に答えなさい。

A

廻れば大門の見返り柳いと長けれど、お齒ぐる溝に燈火うつる三階の騒ぎも手に取るごとく、明けくれなしの車の行来にはかり知られぬ全盛をうらないて、大音寺前と名は仏くさけれど、さりとて陽気の町と住みたる人の申し、三嶋神社の角をまがりてよりこれぞと見ゆる大慶もなく、かたぶく軒端の十軒長屋二十軒長や、商いはかつふつ利かぬところとて半さしたる雨戸の外に、あやしき形に紙を切りなして、胡粉ぬりくり彩色のある田楽みるよう、裏にはりたる串のさまもおかし、一軒ならず二軒ならず、朝日に干して夕日にしもう手当ことごとしく、一家内これにかかりてそれは何ぞと問うに、知らずや霜月酉の日例の神社に欲深様のかつぎたもうこれぞ熊手の下ごしらえという、正月門松とりすつるよりかりて、一年うち通しのそれは誠の商売人、片手わざにも夏より手足を色どりて、新年着の支度もこれをば当てぞかし、南無や大鳥大明神、買う人にさえ大福をあたたまたまえば製造もとのわれら万倍の利益をと人ごとに言うめれど、さりとて思いのほかなるもの、このあたりに大長者のうわさも聞かざりき、住む人の多くは廓者にて良人は小格子の何とやら、下足札そろえてがらんがらの音もいそがしや夕暮より羽織引かけて立出れば、うしろに切火打かくる女房の顔もこれが見納めか十人ぎりの側杖無理情死のしそこね、恨みはかかる身のはて危うく、すわと言わば命がけの勤めに遊山らしく見ゆるもおかし、娘は大離の下新造とやら、七軒の何屋が客廻しとやら、提燈さげてちよこちよこ走りの修業、卒業して何になる、とかくは檜舞台と見たつるもおかしからずや、垢ぬけのせし三十あまりの年増、小ざっぱりとせし唐棧ぞろいに紺足袋はきて、雪駄ちゃらちゃら忙がしげに横抱きの小包はとわでもしるし、茶屋が棧橋とんと沙汰して、廻り遠やここからあげまする、誂え物の仕事やさんとこのあたりには言うぞかし、一体の風俗よそと変りて、女子の後帯きちんとせし人少なく、がらを好みて幅広の巻帯、年増はまだよし、十五六の小癪なるが酸漿ふくんでこの姿はと目をふさぐ人もあるべし、所がらは是非もなや、昨日河岸店に何紫の源氏名耳に残れど、きょうは地廻りの吉と手馴れぬ焼鳥の夜店を出して、身代たたき骨になれば再び古業への内儀姿、どこやら素人よりは見よげに覚えて、これに染まらぬ子供もなし、秋は九月仁和賀の頃の大路を見たまえ、さりとてはよくも学びし露八が物真似、榮喜が処作、孟子の母やおどろかん上達の速やかさ、うまいと褒められて今宵も一廻りと生意気は七つ八つよりつりて、やがては肩に置手ぬぐい、鼻歌のそそり節、十五の少年がませかた恐ろし、学校の唱歌にもぎつちふんちふんと拍子を取りて、運動会に木やり音頭もなしかねまじき風情、さらでも教育はむずかしきに教師の苦心さこそと思わるる入谷ちかくに育英舎とて、私立なれども生徒の数は千人近く、狭き校舎に目白押の窮屈さも教師が人望いよいよあらわれて、ただ学校とひと口にてこのあたりには吞込みのつくほどなるがあり、通う子供の数々にあるいは火消人足、おとっさんは刎橋の番屋に居ると習わずして知るその道のかしこさ、梯子のりのまねびにアレ忍びがえしを折りましたと訴えのつべこべ、三百という代言の子もあるべし、お前の父さんは馬だねえと言われて、名のりや愁らき子心にも顔あからめるしおらしさ、出入りの貸座敷の秘蔵息子寮住居に華族さまを気取りて、ふさ付き帽子面もちゆたかに洋服かるがるとはなはなしきを、坊ちゃん坊ちゃんとしてこの子の追従するもおかし、多くの中に龍華寺の信如とて、千筋となす黒髪も今いく歳のさかりにか、やがては墨染にかえぬべき袖の色、発心は腹からか、坊は親ゆずりの勉強ものあり、性来おとなしきを友達いぶせく思いて、さまたまの悪戯をしかけ、猫の死骸を縄にくくりてお役目なれば引導をたのみますと投げつけしこともありしが、それは昔、今は校内一のひととて仮にも侮りての処業はなかりき、歳は十五、並背にていが栗の頭髪も思いなしか俗とは変りて、藤本信如と訓にてすませど、どこやら釈といいたげの素振なり。

B

まつくろけの猫が二疋、

なやましいよるの家根のうへで、

びんとたてた尻尾しっぽのさきから、

糸のやうなみ、かづきがかすんでゐる。

『おわあ、こんばんは』

『おわあ、こんばんは』

『おぎやあ、おぎやあ、おぎやあ』

『おわああ、ここの家の主人は病氣です』

年中借金取が出はいりした。節季はむろんまるで毎日のことで、醬油屋、油屋、八百屋、鰯屋、乾物屋、炭屋、米屋、家主その他、いずれも厳しい催促だった。路地の入口で牛蒡、蓮根、芋、三ツ葉、蒟蒻、紅生薑、鰯、鰯など一錢天婦羅を揚げて商っている種吉は借金取の姿が見えると、下向いてにわかに鰻鮓粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、はよ牛蒡揚げてんかいナ」と待てしばしがなく、「よっしや、今揚げたアるぜ」というものの搥鉢の底をごしごしやるだけで、水漬の落ちたのも気付かなかった。

種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合おうと、

「人さまの家の板の間たたいて、あんた、それでよろしおまんのんか」と血相かえるのだった。「そこは家の神様が宿ったはるところだっせ」

芝居のつもりだがそれでもやはり興奮するのか、声に涙がまじる位であるから、相手は驚いて、「無茶いいなはんナ、何も私はたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、二三度押問答のあげく、結局お辰はいい負けて、素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さねばならなかった。それでも、一度だけだが、板の間のことをその場で指摘されると、何ともいい訳けのない困り方でいきなり平身低頭して詫言を入れ、ほうほうの体で逃げ帰った借金取があったと、きまってあとでお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であった。

そんな母親を蝶子はみつともないとも哀れとも思った。それで、母親を欺して買食いの金をせしめたり、天婦羅の売上箱から小銭を盗んだりして来たことが、ちよつと後悔された。種吉の天婦羅は味で売ってなかなか評判よかったが、そのため損をしているようだった。蓮根でも蒟蒻でもすこぶる厚身で、お辰の目にも引き合わぬと見えたが、種吉は算盤おいてみて、「七厘の元を一錢に商って損するわけではない」家に金の残らぬのは前々の借金で毎日の売上げが喰込んで行くと

めだとの種吉の言い分はもつともだったが、しかし、十二歳の蝶子には、父親の算盤には炭代や醬油代がはいっていないと知れた。

天婦羅だけでは立ち行かぬから、近所に葬式があるたびに、駕籠かき人足に雇われた。氏神の夏祭には、水着を着てお宮の大提燈を担いで練ると、日当九十銭になった。鎧を着ると三十銭あがりだった。種吉の留守にはお辰が天婦羅を揚げた。お辰は存分に材料を節約したから、祭の日通り掛りに見て、種吉は肩身の狭い想いをし、鎧の下を汗が走った。

よくよく貧乏したので、蝶子が小学校を卒えると、あわてて女中奉公に出した。俗に、河童横町の材木屋の主人から随分と良い条件で話があったので、お辰の頭に思いがけぬ血色が出たが、ゆくゆくは妾にしろとの肚が読めて父親はうんと言わず、日本橋三丁目の古着屋へばかに悪い条件で女中奉公させた。河童横町は昔河童が棲んでいたといわれ、忌われて二束三文だったその土地を材木屋の先代が買い取って、借家を建て、今はきびしく高い家賃も取るから金が出来て、河童は材木屋だと陰口きかれていたが、妾が何人もいて若い生血を吸うからという意味もあるらしかった。蝶子はむくむく女めいて、顔立ちも小ぢんまり整い、

材木屋はさすがに炯眼だった。

日本橋の古着屋で半年余り辛抱が続いた。冬の朝、黒門市場への買出しに廻り道して古着屋の前を通り掛った種吉は、店先を掃除している蝶子の手が赤ざれて血がにじんでいるのを見て、そのままだといって掛け合い、連れ戻した。そして所望されるままに曾根崎新地のお茶屋へおちよぼ（芸者の下地ッ子）にやった。

問① A・B・Cの作品名と作者名を記しなさい。

作品名			作者名		
A	〔	〕	〔	〕	〕
B	〔	〕	〔	〕	〕
C	〔	〕	〔	〕	〕

問② A・B・Cの中から一つを選び、作品の内容・表現（視点や語り手、文体、技法など）について説明しなさい。文学史的意義に関する記述をもって説明にかえてもかまいません。

3 文学史

次の日本文学史上の用語(ア)～(エ)について簡潔に説明しなさい。

(ア) 『土佐日記』

(イ) 井原西鶴

(ウ) 永井荷風

(エ) 私小説